屋 形 船 赤 谷 慶子

儀なりと記憶す。 風流なる屋形船に搖られ、 過去に二囘斯 0 如き機會に惠まれたれど、 美酒と天麩羅を樂しむ。 屋形船の船上にて食事するはなかなか難 特に櫻を船より愛づるは 味なるも

り鑑賞の風情なり。 親しみたるゆゑか、 船醉ひ狀態になりにけり。 に續く排煙と共に上がる花火をただただ啞然と見上ぐるのみ。 船醉ひして顔蒼ざめ、花火鑑賞の氣分に及ばざるあり。 横に搖らる、 夥しきのありとあらゆる船東京灣に犇めつ。 麩羅の夕食を賜はる。 度目は友人の猫の十歳の誕生日とて招待せらる。 といふよりは、 大きなる音の花火空に舞ひ上がれど、 されど、 猫はと見れば、 大海原の小舟のごとく上下に搖る。 前日東京灣の花火大會、 飼ひ主の家神宮球場に近く、 隣の船に手が届く程の舷側に波去來して、 淺草橋より乘船 招待客は屋形船の真上にて爆音 雨のため順延せられたれば、 さして驚きもせず、 乘り物に強きはずの我も また、 夏の花火に慣れ 船の搖れ大きく 東京灣にて天 籠の中よ

ならざりしは未だに心殘りす。 く飾らるるも興ざめなりけり。 颱風に向かふ漁船のごとく搖る。 し時なり。 二囘 目は外務省の某大使主催の櫻鑑賞のため、 濱松町より乘船、 これまた、 又 庭園近くに到著すれど、 確かに滿開の櫻は素晴らしけれど、 猛スピードにて庭園まで走行する船は、 屋形船貸し切りにて清澄庭園まで上り 天麩羅など箸を附くる氣にも 赤と白の提燈多 まさに

屋形船にての夕食は花見程には風流にあらざりけり。